

## 第二六回参議院議員通常選挙・北海道選挙区の情勢調査に関する覚書

浅野一弘

二〇二二年七月一日におこなわれた、第二六回参議院議員通常選挙・北海道選挙区の結果は、表1のとおりとなった。

表1 選挙結果

候補者名	所属政党	得票数	得票率
長谷川 岳	自由民主党	59万5,033票	25.45%
徳永 エリ	立憲民主党	45万5,057票	19.47%
船橋 利実	自由民主党	44万7,232票	19.13%
石川 知裕	立憲民主党	42万2,392票	18.07%
畠山 和也	日本共産党	16万3,252票	6.98%
臼木 秀剛	国民民主党	9万1,127票	3.90%
大村小太郎	参政党	7万5,299票	3.22%
斉藤 忠行	NHK党	2万3,039票	0.99%
石井 良恵	NHK党	1万8,831票	0.81%
浜田 智	NHK党	1万8,760票	0.80%
沢田 英一	新党くにもり	1万6,006票	0.68%
森山 佳則	幸福実現党	1万1,625票	0.50%

五九万五〇三三票を獲得した、現職の長谷川岳は、事前の情勢調査でも、終始首位をキープしてきた。ここで、情勢調査を報じる各新聞社の見出しを概観してみよう。公示後、一度しか調査結果を掲載しなかったのが、ともに七月一日〜三日に世論調査をおこなった、日本経済新聞社と読売新聞社である。前者の見出しは、「二〇二二参院選の情勢——選挙区、改選定数七四、北海道東北、北海道、長谷川を徳永・船橋・石川猛追」という

ものだが、あくまでも全国の情勢を伝えるなかの一部というあつかいでしかなかった\*。後者のほうは、「参院選 情勢調査 自民・長谷川氏が優位 徳永、石川、船橋三氏競る北海道」との見出しが北海道版におどった\*。

つぎに、公示後、二回、情勢調査の結果を掲載した新聞に目を転じよう。まず、朝日新聞社の一回目の見出しは、「長谷川氏が引き離す 徳永氏や優位 石川氏・船橋氏互角 朝日新聞社序盤情勢調査 参院選／北海道」（調査日：六月二二日・二三日）というもので\*、二回目のときには、「長谷川氏依然安定、石川氏やや優位に 徳永氏、船橋氏と接戦に 朝日新聞社終盤情勢調査 参院選／北海道」（調査日：七月四日・五日）というものになっていた\*。毎日新聞社の場合、六月二五日・二六日の調査結果では、「参院選二〇二二序盤情勢、毎日新聞総合調査 長谷川氏やや優勢 徳永、船橋、石川氏競り合う／北海道」と\*、そして、七月二日・三日の調査結果を受けた記事では、「参院選二〇二二・長谷川氏、一歩先行中盤情勢 徳永、船橋、石川氏競る 毎日新聞総合調査／北海道」との見出しとなっていた\*。最後に、地元紙の北海道新聞社の結果に着目しよう。六月二二日・二三日の調査にもとづく第一回の見出しは、「参院選序盤情勢\*長谷川氏やや

先行\*道選挙区\*立憲、自民の三氏が迫る」で\*、第二回は、「長谷川氏やや優位\*道選挙区\*徳永、石川、船橋氏激戦」（調査日：七月二日〜四日）となっていた\*。

これらをもて明らかにするように、「自民・長谷川氏が優位」「長谷川氏が引き離す」「長谷川氏やや優勢」「長谷川氏やや先行」と、表現こそちがえど、二人の候補者中、一貫して長谷川氏が選挙戦をリードしてきたことがわかる。ただ、二位から四位については、若干の変動があったようだ。ここで留意しておきたいのは、「各政党が独自に調査したデータを取材し、自分たちの調査結果、そして過去のデータをすり合わせ、トータルで判断する」情勢調査において、「実は数%でもリードしている方の名前を最初に持ってくるのが新聞記事のお約束になっている」という事実である\*。それゆえ、各紙の報道による名前のならび順をみれば、おのおの新聞社の情勢認識が浮き彫りになるといえることだ。

表2は、新聞社のおこなった世論調査の実施日の順に、二位以下の結果をならべたものである\*。表2をみると、石川知裕の落選を的中していたのは、七回の情勢調査中、半分以下の三回しかないということになる（毎日新聞社〔第一回・第二回〕および日本経済新聞社）。逆に、石川が三人の候補のうち、もっとも有利とした分析結果も二回あった（北海道新聞社〔第一回〕および朝日新聞社〔第二回〕）。北海道新聞社（第一回）では、三人の候補が「横一線」とはしつつも、石川の名前を最初にあげていた。朝日新聞社にいたっては、「立憲民主新顔の石川知裕氏（四九）が一歩抜け出た」との表現で、石川が三候補のうち、リードしていることを報じていた。とりわけ、朝日新聞社の場合、一回目の情勢調査では、「立憲民主現職の徳永エリ氏（六〇）がやや優位に立っている。

残る一議席を巡って、立憲民主新顔の石川知裕氏（四九）と自民新顔の船橋利実氏（六一）が互角の激しい戦いを繰り広げている」としていたものの、選挙戦終盤で、「立憲民主現職の徳永エリ氏（六〇）は序盤で一步リードしていたが勢いがやや落ち、自民新顔の船橋利実氏（六一）と残る一議席を巡り激戦を繰り広げている」と、現実の選挙結果とは異なる情勢分析をしていたのだ。

表2 情勢調査の名前の並び順

新聞社名	調査実施日	2位以下の名前の並び順		
朝日新聞社(第1回)	2022年6月22日・23日	徳永	石川	船橋
北海道新聞社(第1回)	2022年6月22日・23日	石川	徳永	船橋
毎日新聞社(第1回)	2022年6月25日・26日	徳永	船橋	石川
日本経済新聞社	2022年7月1日～3日	徳永	船橋	石川
読売新聞社	2022年7月1日～3日	徳永	石川	船橋
毎日新聞社(第2回)	2022年7月2日・3日	徳永	船橋	石川
北海道新聞社(第2回)	2022年7月2日～4日	徳永	石川	船橋
朝日新聞社(第2回)	2022年7月4日・5日	石川	徳永	船橋

が変わっていたのだ。

結果的に、二回の情勢調査を掲載した毎日新聞社だけが選挙結果を的中したといえよう。しかも、同社の場合、序盤戦で、「残る二議席を巡って立憲民主党現職の徳永エリ氏、自民新人の船橋利実氏、立憲新人の石川知裕氏が激しく競り合う展開となっている」、中盤戦で、「残る二議席を巡って立憲民主党現職の徳永エリ氏、自民新人の船橋利

北海道新聞社も、二回の情勢調査で、候補の順位が変化していた。先述したように、選挙戦序盤では、石川、徳永エリ、船橋利実の順で、「横一線」としていたものが、「立憲民主党現職の徳永エリ氏（六〇）、立憲新人の石川知裕氏（四九）、自民新人の船橋利実氏（六一）の三人が横一線で激しく競り合う展開」と、おなじ「横一線」という表現をもちいながら、名前の並び順

は、石川、徳永エリ、船橋利実の順で、「横一線」としていたものが、「立憲民主党現職の徳永エリ氏（六〇）、立憲新人の石川知裕氏（四九）、自民新人の船橋利実氏（六一）の三人が横一線で激しく競り合う展開」と、おなじ「横一線」という表現をもちいながら、名前の並び順

実氏、立憲新人の石川知裕氏が激しく競り合う展開が続いている」と、二回の分析で、三候補の順番にも変化はなかった。その意味で、「有権者を対象にインターネット調査を実施し、取材で得た情報と合わせて」、「情勢を分析した」毎日新聞社の取材力の正確さというものが伝わってくる。

このように、新聞社による七回の情勢調査の内容をみてきたが、最後に、選挙の折りに話題となるアナウンスメント効果についてふれておきたい。これは、「選挙に際して、マス・メディアなどが発表した選挙予測が有権者の投票行動に影響をもたらすこと」で、たとえば、「衆議院選挙では、『当落線上』とか『あと一步』と予測された候補者が上位で当選したり、逆に『当選確実』と予測された候補者が苦戦する現象がしばしばみられる」ようだが<sup>\*11</sup>、まさに、第二六回参議院議員通常選挙・北海道選挙区においてもこの効果が見られたとみてよいのではなからうか。二〇二〇年の数値で見ると、北海道内の新聞普及率は、北海道新聞社三三・三二%、読売新聞社六・〇六%、朝日新聞社三・五二%となっていて、圧倒的に北海道新聞社のシェアが大きい<sup>\*12</sup>。この北海道新聞社の二回の情勢調査において、二回とも、船橋は当選圏外とされていたのだ。そのうえ、「安倍元首相暗殺の影響は興味深い話かと思えます。一部選挙区では、明らかに自民にプラスに働いていた模様です」とする、報道関係者の声もある<sup>\*13</sup>。

安倍晋三の死亡という衝撃的なニュースが、有権者の「判官びいき効果（underdog effect）」をよりつよくはたらかせたにちがいない。

△注▽

- \* 1 『日本経済新聞』二〇二二年七月四日、九面。
- \* 2 『読売新聞』（北海道版）二〇二二年七月五日、二七面。
- \* 3 『朝日新聞』（北海道版）二〇二二年六月二六日、二六面。
- \* 4 同右、二〇二二年七月八日、二四面。
- \* 5 『毎日新聞』（北海道版）二〇二二年六月二八日、二一面。
- \* 6 同右、二〇二二年七月四日、二一面。
- \* 7 『北海道新聞』二〇二二年六月二四日、一面。
- \* 8 同右、二〇二二年七月六日、一面。
- \* 9 <https://times.abema.tv/articles/3125366>（二〇二二年七月三〇日）。
- \* 10 なお、北海道新聞社の一回目の報道では、見出しにこそ三候補の名前はでていなかったものの、記事で、「立憲民主党新人の石川知裕（四九）、同党現職の徳永エリ（六〇）、自民党新人の船橋利実（六一）の三氏が横一線で追う展開」とあったので、この順番をもちいた。
- \* 11 小林良彰「アナウンス効果」大学教育社編『現代政治学事典』（おうふう、一九九四年）、一三頁。また、アナウンスメント効果については、浅野一弘「ラジオで語った政治学3」（同文館出版、二〇一九年）、一四七―一四八頁も参照されたい。
- \* 12 「上位三紙朝刊販売部数・世帯普及率」([https://adv.yomiuri.co.jp/mediadata/files/2030\\_circulation.pdf](https://adv.yomiuri.co.jp/mediadata/files/2030_circulation.pdf)（二〇二二年七月三〇日））。
- \* 13 関係者からの電子メールによる回答（二〇二二年七月三〇日）。

へあきの かずひろ・札幌大学名誉教授▽